

## 2011年度 第1回特別講義 レポート

日時	2011年5月20日(金) 10:00~12:00
会場	(財)日本科学技術連盟・東高円寺ビル 2階講堂
テーマ	「論文的思考のすすめ ~今こそ問題解決できる組織へ~」
講師名・所属	清水 吉男氏 (株式会社 システムクリエイツ)
司会	第6分科会 派生開発 副主査 飯泉 紀子氏 (株式会社 日立ハイテクノロジーズ)
アジェンダ	1. 私とSQiPとの出会い 2. 品質について 3. 私にとっての論文的思考 4. 論文的思考から見た現状の問題 5. 今回の研究員の皆さんへのメッセージ
アブストラクト	私自身、フリーでこの仕事をやって行くために取った行動が論文を読むことであった。たくさんの論文を読んでいるうちに、論文の構造が共通していて、それが問題を解決する思考のステップになっていることに気がついた。この論文の構造を使ってソフトウェア開発に必要な技術の習得や問題を解決してきた。 今日、多くの問題が組織の中に溢れているが、そこには「論文的思考」の欠如が問題を拡散させ、より複雑にしている面がある。 SQiPの研究会を通じて、ぜひ論文的思考を身につけて欲しい。
<b>&lt;講義の要約&gt;</b>  <b>◆問題を解決できない組織の特徴</b> ・組織の問題を定義する、あるいは解決方法を理解する能力が不足している。 ・根本的にソフトウェア・エンジニアリングの技術が不足している。 ・相手の評価よりも、欠点を指摘するような企業文化が蔓延し、自発的に活動する意欲が失われた受動的なスタッフが多い。  <b>◆問題解決の取組み</b> <b>1, 問題分析</b> 解決すべき現場の問題を集めて分類する。  <b>2, 課題設定</b> 解決すべき問題と、問題を引き起こしている原因を推測する。	

### 3, 関連技術の収集

問題をその原因から解決するような新しい方法を、文献や論文から探す。

### 4, シミュレーション

新しい方法が現実に効果を発揮するか、自分の置かれている状況に合わせてプロセスを調整し、事前に机上でシミュレーションを行う。シミュレーション後、効果を確認した時点で現場への提案を行う。

### 5, 実施と検証

事前にシミュレーションを行うことで、混乱無く新しい方法を実施できる。また原因をとらえて実施しているので概ね効果が出る。

### 6, 残った課題の確認

効果を上げなかったケースを整理し、取組み方法を調整して次回の機会へと回す。

### 7, 論文の形式で取組みを記録

効果を記録することで、取組みを確実なものにでき、他のスタッフによる水平展開も容易になる。

#### ◆清水氏と論文との接点

- ・論文を読むことで、課題に対する解決方法を学んだ。
- ・数多くの論文を読むことで、そこに共通する問題解決の手順「論文的思考」があることに気付いた。
- ・現場で行った問題解決の内容を論文形式でまとめるようになってから、技術の習得を確実に伝えるようになってきた。

#### ◆品質は技術と心で実現するもの

品質は技術だけでは実現しない。スタッフ一人ひとりに知識や技術を継続的に学習しようとする心が必要になる。心を形作るのはその人の持つ人生観や職業観であり、プロとして人や社会に貢献する、顧客の要求に応えようとする心が重要である。一定の成果で満足しては成長が止まってしまう。

#### ◆肯定眼、能動

- ・効果的な取組みを水平展開して行くには、人の優れたところを認めて学んでいく姿勢、すなわち肯定眼が不可欠である。肯定眼を持ち、人の優れたところを見つけて真似る行為が水平展開の出発点である。
- ・相手が出してきた成果に対し、良かった点をその理由を添えて指摘することで、周囲のスタッフの記憶にも残り、水平展開へと繋がっていく。

◆SQiP 研究員への期待 ～論文的思考を身につける～

- ・勉強時間をまず確保し残りの時間で生活することで、毎日確実に勉強する習慣を身につけて欲しい。
- ・論文の取組み方を身につけ、論文的思考の有効性を周囲にも伝えて欲しい。
- ・課題を持って研究活動に臨んで欲しい。

『この一年が研究員の皆さんにとって、人生の転機となることを願う。』

<講義の感想>

仕事で成果を出して行くには、現場の課題を見るだけでなく、自分の人生観や職業観についてもしっかりとした軸を持つ事が重要であると話されているのを聞き、とても感銘を受けました。自ら視野を狭くして成長が止まらないように、自分の生き方を問い続けて仕事や研究に取り組もうと思います。